

半農半Xという生き方と 「里山ねっと・あやべ」がめざすもの

半農半X研究所代表
塩見 直紀

塩見直紀（しおみ なおき）

1965年、京都府綾部市生まれ。現在、同市在住。

屋久島在住の作家・翻訳家・星川淳さんのライフスタイル「半農半著」にインスパイアされ、1995年から21世紀の生き方、暮らし方として「半農半X」というコンセプトを提唱。

2000年、「半農半X研究所」を設立。市町村から個人までの「X」（エックス＝天職）を応援する「ミッションサポート」と「コンセプトメイク」がライフワーク。また、2000年より「里山ねっと・あやべ（現・NPO法人）」のスタッフとして、綾部の可能性や21世紀の生き方、暮らし方としての「里山的生活」を市内外に向けて発信。

2006年、「半農半Xデザインスクール@綾部」を開校。

過去、田舎暮らしツアー、農家民泊、綾部里山交流大学などを企画してきた。

著書に『半農半Xという生き方 実践編』『綾部発 半農半Xという人生の歩き方88』

『半農半Xの種を播く』（共編著）など。『半農半Xという生き方』は2006年に台湾でも翻訳出版された。京都府の「農あるライフスタイル検討委員」などをつとめる。

塩見 皆さん、初めまして。京都の綾部市からまいりました塩見と申します。よろしくお願ひします。今日は龍谷大学では、同時刻に大江健三郎さんの講演もあるとのことで、大江健三郎さんより最先端なことをほんの少しでもお話しできたらと思っております。それだけのことは自分の中にはあるのではないかと思うのです。時代が大江さんに追いついているという言い方もできるかもしれませんが、いま大事だと思ふことをお伝えできたらと思ひます。

まず、「商い」のことからお話ししたいのですが、商いの極意というのは、「知ってもらうこと」と、「買ってもらうこと」だそうです。その存在を知ってもらわないと買ってもらえない。その二つがとても重要だそ

うなんです、今、私がやろうとしていることは「半農半Xという生き方」、そういうコンセプトがあるということを広くみんなに伝える仕事ではないかと思ひます。ソニー・マガジズという出版社から本を出させていただいたんですが、それによって半農半X（エックス）というのは少しずつ広がりました。この間、朝日新聞の「ニッポン人脈記」で紹介していただき、また広がっていつているのではないかと思ひますが、まだまだ半農半Xというコンセプトは知ってもらっていない面がありますので、ぜひお伝えできたらと思ひます。

これは農村、地域経営もそうなんです、
「知られていないのは、ないのと同じ」という言葉があつて、ビジネスでも農村の魅力

でもそうだと思うんです。ほんとに厳しい言葉ですが、知られていないというのは、ないのと同じ。もちろんそこにある森林資源から酸素を供給したりという、いろんなことがあるかもしれないですが、知られているということはとても大事ななと思っています。

今日は半農半Xという、私のプライベートの活動と、「里山ねっと・あやべ」という綾部市の施策で綾部市が公設民営化、NPO法人化したものと、二つのことを同時にお話させていただきます。話が少し混ざってしまうかもしれませんが、その二つがめざすところは何なのかをお話できればと思っています。

社会と私の融合「半農半X」

レジュメが二つあります。一つは半農半Xという生き方に関するもの。それから半農半X研究所と「里山ねっと・あやべ」のことについて30分ずつお話しして、質疑に移りたいと思います。

まず半農半Xについてですが、ここ龍谷大学にはJRでやってきました。線路というのはレールが2本あって、そこを電車が走っています。レールの1本は社会、もう1本は自分と考えています。この二つが平行線上にあるのが今の日本、現在というものではないかと思っています、それがいつまでたっても平行で寄り添っていない。それに対してXというのは混ざり合っている。この混ざり合っているというのが、融合するというのが、今日とても大事なことではないかと思っています。

これは最近知ったんですが、Xという文字を毎日見つけると幸せになるというこ

とを心理学的に言われることがあります。それはなぜかということ統合・融合の象徴としてXがあるそうです。

私は1965年に綾部の静かな小さな村で生まれました。同級生は10名で全校生徒60名。その小学校は1999年に閉校となって、その跡地を利用して「里山ねっと・あやべ」が生まれました。今、都市と農村の交流をしています。ほんとに小さな村で生まれました。今から考えてそこで生まれてよかったなと思うのは、たとえばこういうことです。村の行事として「山の神様」という行事がありました。子どもたちが12月になると山に住む神様のために小屋をつくってお供えに行くということなのですが、そこで僕たちは「山には神様がいる」という考え方を学びました。多神教、アミニズム的な社会の方がいいなと思っていますが、中心は一つではなくて楕円とか多様性がキーワードになるのではないかと思っています。

綾部というところは大本教と、グンゼという繊維業（現在ではバイオの会社ですが）、それともう一つ、合気道の発祥地で有名なところでもあります。私の小学校は30年前から「平和都市」という言葉が入った校歌を歌っていましたが、綾部というのは「平和」を模索してきたまちでもあります。そんな視点で綾部というまちを見てみますと、周辺の福知山や舞鶴と比べると精神的な何かが違う。そういうことが一つの特徴ではないかと思います。

まちづくりにおいては、そういう特徴をうまく言葉にして表現していくことがとても大事ではないかと思っています。というのは「心の時代」になると言われて久しいのですが、さらにますます心の時代になっていくだろうと思うからです。そんな中において

綾部の役割とは何か。人に天職、ミッションがあるように、市町村にもX、ミッションがあるというのが私の考え方なんですけど、この世界において、綾部には綾部の役割があると思っています。

子どもの頃に綾部で過ごして、その後、大学入学から15年間、都会に出ていました。私が入社したのはパプルの頂点の1989年なんですけど、その会社が環境問題に大変関心を持った会社でした。当時から環境問題を熱心にやっていた。というのはカタログ通販の会社だったので、紙を大量に消費することもあって環境問題に取り組んでいるということもあるのですが、環境問題とそこで初めて出合って大変ショックを受けました。

私たちはまるで最後の時代を生きているんじゃないか、そんなことを思うようになりました。そこで環境問題のいろんな本を読むうちに農業の問題を思うようになりました。誰が農産物をつくるのか、日本人なのか、中国人なのか。他人なのか、自分も汗を流すのか。いろんなことを議論する中で何も実践していない自分が農業問題を語るのは説得力のないことでした。我が家の実家が田んぼとか畑とか山があったので、1996年から実際に田んぼ、畑をやるようになって今年で12年たちます。環境問題から農業のことを思うようになり、食糧自給率が低い日本にいて自分はどうしたらいいのかを思うようになりました。ちなみに父は京都教育大学を出た教員だったんです。半分農業をしながら小学校の教員をしておりました。綾部市民の大半は兼業農家ということでもあります。

会社に入ってもう一つ大きな出会いとなったのが同期入社した人たちの存在です。

大変ユニークな人材が多くて、そこで自分の存在意義を初めて考えるようになりました。京都市立芸大出身などのユニークな発想を持った有能な人材が入社していて、そんな中で僕は文学部国史学科日本史の専攻で、奈良・平安時代を勉強していた。そんな人間が企業に入って、何かちょっとおいていかれるんじゃないか、トレンドの会社に入って、これはまずいんじゃないかなということで、そこからようやく自分探しを始めるようになりました。私は今から振り返れば「環境問題」と「生き方」の問題が2大問題だったんじゃないか。その二つの問題とぶちあたって、そこで出てきた答えが「半農半X」であったのではないかと思います。いま私はこの2つの問題を「21世紀の2大問題」ではないかという仮説を持っています。

環境問題を考えるとライフスタイルの問題に行き当たります。それを「半農」という観点から考えるのと、いっぽう心、人生の問題、なぜ生まれてきたのか、これからどうして生きていくのか、自分は何のために生まれてきたのかを考えていくことが「半X」ということで、二つの問題を同時に解決することはできないかということでも生まれたのが「半農半X」というコンセプトではないかなと思います。

「半農半X」という言葉は屋久島在住の作家・翻訳家である星川淳さんが、本の中で「半農半著」という言葉を書かれていました。半分農業して半分著述業をする。エコロジカルな暮らし方をベースとしながら執筆で社会にメッセージを出すという生き方で、この言葉に出会ったのが1994、1995年だったと思います。この言葉に出会って、「21世紀の生き方はこれだ」と確信しました。そ

の後、思ったのは「じゃ、自分は、著述業はできないけど、何だったらできるだろう」という問いです。半農半の後が見つかりませんでした。自分は何もできないと愕然としました。しばらくの間はそこに自分の「それ」という意味で「it」と入れていたんですが、ある時、アルファベットのXという文字を入れたらピタリとはまって、それが四字熟語となって「あ、これからの生き方はこれなんじゃないか」と悟ったのです。周りを見渡しても皆、自分探しをしていたし、環境問題に敏感で農業を始めたいとか、始めている人がたくさんいました。周りにもそういう事例もあるし、自分もこういう生き方ならいいと思ったので「半農半X」という生き方を、1995年、阪神・淡路大震災の頃から提唱するようになりました。

提唱といっても当時、メディアに採り上げられたことはなくて、口コミで友だちに半農半Xについて話すくらいだったのですが、初めてメディアに登場しましたのが1998年のことです。その後、1999、2000、2001年くらいから時代が大きく変わって、2002年に農文協の『青年帰農』に原稿を書くように言われて、2003年にソニー・マガジズから本を出させていただきました。最初はソニーという会社名から農の本を出すのはどうだろうか、自分にとってマイナスなのではないかと思ったんですが、ソニーから出させていただくことによって若い人に手にとっていただいて、都会を中心に広がったのではないかと思います。紀伊国屋書店のデータによると読者の圧倒的年代は20代から40代で、自分と同じ世代が同じように悩んでいたのではないかと考えています。50、60代の人でも本を読んでくださって綾部に訪れてくださるんですが、

ポリウムゾーンは30歳前後、団塊ジュニア前後ではないかと思っています。このことが何を意味するかがとても重要です。

半農半Xというのは「私と世界が交わって生まれる何か」ということではないかと思っています。パラレルな平行線上ではなく、「交わる何か」ではないかと思っています。最近、社会起業家という言葉がよく使われますが、起業というものの方向性として「社会性」ということが言われます。半農半Xも社会起業もそういう意味では共通点があるのではないかと思いますが、Xというのは人の数だけあって、未知数で、多様性で、出会い、交流、コラボレーションも表しているのではないかと思います。

「半農」という言葉ですが、「時間」でも「広さ」でもないという考え方にしています。広さは何反からですか、何町ならOKですかということではなく、ベランダでもOK、市民農園でもOK、屋上菜園でもOKという考え方をしています。これからは「東京で半農半X」というスタイルを広げていくことも大事なと思うし、京都府が屋上の緑化に熱心になっています。京都市内でも屋上で自給農をしながらNPO法人を設立した方もいらっしゃいます。そういうスタイルもありかなと思っています。時間はどれくらいならOKなのか。半日なのか、3時間なのか、30分なのか。私は土に触れるだけでもいい、それが1分でも3分でも土とか他の生物に触れることによって人間中心的な考え方を超えていくことが大事かと思っています。

半農というのは別の言葉で言えば「命」とか「感性」です。今年はレイチェル・カーソン生誕100年ですが、“Sense of Wonder”、自然の驚異、畏怖、こわさ、す

ごさに感心する感性が半農と言ひ換えられるのではないかと思います。昨日も田植えをしていたんですが、私は田んぼにはペンとメモを持って行って、それで田んぼで生まれたインスピレーション、アイデアを書き留めて家に持ち帰って文にしたり、企画書にまとめていたりしています。田んぼも素足で入るんですが、空があって、土があって、そこに蛙がいて、オタマジャクシがいて、さらには雲雀が飛んでいて、そんなところで自分を解放することによってとてもアイデアが生まれやすい状態にしておいて、そこから生まれた言葉をXに生かす。私にとってXと農は分離したものではなく、一つであって、Xは農に、農はXに影響を与える。そういうものではないかと思っています。

キーワード：地球環境・コミュニティ・家族

半農半Xが重視する8つのキーワードをあげたいと思います。最近、特に伝えたいことなのですが、半農半Xの周囲に8つキーワードがあります。3マス×3マスの曼陀羅の形をイメージしてもらいたいのですが、下の3つは「場所」を表しています。真ん中は地球環境、持続可能性。もう持続可能性なしには語られない時代になっている。その隣がコミュニティ、地元です。最近、「地元学」が流行っていますけど、地元はとても大事。終の住処だったり、修行の舞台、都会の方なら、それは下町なのか、自分の生まれた故郷なのか、このへんだったら宇治とか伏見とか。そういう舞台の場所、自分の修行の場所、活動の舞台はとても大事で、もう一つ大事なのは家族ということではないかと思っています。家族団欒とい

うことは死語のように言われていますが、家族も大事なキーワードです。特に若い世代は家族、人間関係を大事にしています。半農半Xで、Xを頑張りすぎると、農を頑張りすぎると家族の時間がなくなります。自分にとっては家族の時間をたくさん持つこと、今は子どもが小さいので18歳まで家にいてくれるとしたら、その時間を大事にしていきたいと思っています。その上には身体性と精神性というキーワードが入ります。身体性とは、小さな農、汗、採などを意味します。いま、この身体感覚がない人が多いのです。精神性とは、瞑想、思索、散歩などを意味します。自分と対話する時間です。これも現代人は失っているものの1つです。

キーワード：ミッション・アート・情報発信

上には3つあります。真ん中は天職、ミッション、役割、自己定義、貢献の舞台。自分は何のために生まれてきたのか。その隣は手仕事、アート。そういうものが取り戻さないといけないことの一つではないかと思っています。ガンジーはHand、Head、Heartと3Hと言ったそうですが、手仕事、手を使うこと、それがアートの表現をすることでも大事で、村人であろうが、田舎に移住したアーティストであろうが、手仕事というのはとても大事ですし、これからは大事になってくると思います。

現代においてもう一つ大事にしたいのが「情報発信」です。ジャーナリスト、出力、シェアです。今までの教育というのはインプット中心だったと思いますが、これからますます学んだことを出していくこと、溜めていても意味がなくて、出してこそ初め

て生かされるというものだと思います。独占という形態に対してシェアすること、分かち合うことがますます大事になってくる。マイクロソフトに対してリナックスのようなオープンソースが大事になってくるということでもあります。京都出身のコンセプターの方が「ジャーナリストとエコロジストとアーティスト、この3つが21世紀において大事になってくるのではないか」と言っています。長い間、ジャーナリストの意味がわからなかったのですが、韓国の「オー・マイ・ニュース」とかブログの隆盛とかの時代になってきて、発信していくことが大事だということがようやくわかるようになりました。この3つを兼ね備えていくような生き方をしていく人が増えていくのではないかと考えています。

私たちは二つのチャレンジがあるのではないかと思うんです。一つは環境問題、持続可能性、(sustainability)。もう一つは自分の持っている特技、得意なことを社会の変革に生かしていくこと、それが大事だと思います。大半の方は「好きなことでは食べていけないぞ」と親から言われてきたのではないかと思うんですが、実際に大好きなことを仕事にして起業を始めている人もいますし、僕は今から数学とか物理をやれと言われるよりも、自分の大好きなことを究めていくことの方が社会にとってプラスなのではないかと思ったりします。

私の個人的な考え方ですが、21世紀の公式として、こんな公式を考えてみました。分母は農のある持続可能な小さな暮らし。1%でも食糧を自給していくような、大きな暮らしに対して小さなシンプルライフです。別な言葉で言えば農、根っこ。「根無し草」と言われるようになって長くたちます

が、根っこはとても大事です。21世紀においても根っこは大事ではないかと思っています。

分子は何か。天与の才、与えられた才能を生かした仕事を高めていくこと。これは別の言葉で言えば「翼」ではないか。別の言葉ではクリエイティビティ、創造性を発揮すること。漢字で言えば「風」、新しい何かを運んでくること。風と土が合わさって「風土」ができるそうなんです。今、大事なのは両方ではないかと思っています。翼と根っこが同時に大事ではないか。根っこだけでは、農だけでは息苦しいかもしれないが、そこに風が吹くことによって、翼があることによっていろんな人とネットワークを結ぶことによっていろんなことが変わっていく。新しい変化を生じさせられるんじゃないかと思っています。

私は「半農半X」という言葉が生まれたことによって、ほんとに救われました。この言葉が今、生まれていなかったらおそらく今も自分探しをしていたのではないかと思うのですが、それだけ羅針盤となるコンセプトは大事ではないかと思っています。新しい概念の事例としてイタリア発の「スローフード」、日本の「地産地消」、福祉の世界でアメリカ発の「チャレンジド」のような新しい概念はとても大事なかなと思っています。新しい概念の創出は大事です。

「田んぼ」の癒し力

半農半Xが解決するものとして、いろんなものがあるのではないかと思うのです。環境問題、食の安全性、食糧自給率、心の問題、生きる意味の喪失や買い物依存症など。昨日も田植えをしていたのですが、大阪からひきこもり歴の長い青年がやってき

て田植えをしてくれました。その子は群衆とか駅の雑踏に弱くて、対人恐怖症なんですけど、去年、田んぼに来てくれて、それでよかったのか、今年も来て、自分の面積、与えられたところに田植えをしたいと来てくれました。

その子はあらゆることがゆっくりなんですけど、びっくりしたのは写真を撮って、フィルムの巻き上げだけは速いのです。それに注目していたところ、彼は写真が好きなんだなということが、そこでわかったんですけど、田んぼの写真をもっともっと撮ってほしいと思います。そういうことからその子の人生がまた変わり出すのではないかと思うのです。

心の面も、素足で田んぼに入っていると本当に癒されたり、エネルギーを得たりしていきます。園芸療法というジャンルがありますが、田んぼには癒す力が確実にある。教育の面も科学の力、科学の心、観察の目とか、田んぼには生命力があります。養老孟司さんとか、いろいろな方が昆虫好きな人がおられますが、科学の目、感性がそこから養われるのではないか。私は中国の国語の先生をさせてもらったことがあります。昔から日本人は自然を感受する心があって、それを表現してきました。それが今もとても大事であると思います。

医療、福祉の面でもプラスになれそうです。今、ほんとに眠れない人が多いのですが、私は農作業をしているせいか、電気を消して3秒くらいで眠れますし、熟眠することができます。近所のおばあちゃんも農作業をした日は早く眠れるといいます。農作業は医療、福祉の観点からも貢献できることがあるのではないか。晩年まで頑張っていて、小さな農をして大好きなことで世の中

に貢献しながら最期はPPK(ピンピンコロリ)という人生が理想ではないかと思えます。ピンピンコロリというかたちで大往生していく。介護をされないで人生を終える、あの世に旅立つということです。

社会的不安、不況とか失業とか、そういう難問を解くキーコンセプトになるのではないかと思います。私の望むところは、ハローワークに行かなくてよくて、自分の仕事を自分でつくれることが大事かなと思っています。「田舎には仕事がない」とよく言われますが、問題は田舎にはいろんな可能性がたくさん眠っていて、それがまだ仕事にされていないだけかもしれない。それを田舎には仕事がないというせいにする時代ではなく、自分の仕事を創っていくことも大事かなと思っています。私は朝3時から6時までの3時間は思索、考えごとをしたり文章を書いたりしています。子どもたちが出かけると田んぼに行ったり、畑に行ったり、小さな汗をかいて、午後には「里山ねっと・あやべ」の仕事をしています。子どもが3時過ぎには帰ってくるので、できるだけパソコンはそこで置いて、子どもと遊んだりして過ごしています。夕食は和食中心ということで手間がかかります。子どもは小学4年生なので、8時半には一緒に寝て、また3時に起きるという暮らし方を5年ほど続けています。

半農半Xという生き方のコンセプトが生まれてから12年くらいたっていますが、これからも今のスタイルでいきたいなと思っています。最先端の半農半Xスタイルをいくつかあげてみましょう。この大学院コースはNPO・地方行政研究コースということですが、最先端の半農半Xスタイルをあえて上げるとしたら「半農半社会起業家」と

か「半農半NPO」とか「半農半スロービジネス」とか「半農半コミュニティビジネス」とか「半農半ヘルパー」とかがあると思います。最近、若い人で多いのは「半農半カフェ」「半農半農家民泊」とか、教育に関心のある方は「半農半寺子屋」、最近、友人が市会議員に当選しましたが、「半農半町議」とか「半農半市会議員」もあるのではないかと。最後に挙げたのが沖縄の例ですが、半分農業をしながら半分歌を歌う「半農半唄者」「半農半歌手」。歌手の加藤登紀子さんは、週末、オフの日は千葉の鴨川で農業をして暮らしておられます。この4月、初めて加藤さんの、鴨川自然王国に行ってきました。歌手として完成されたような加藤さんが未だに進化している。それは農的な暮らしをされることによって、さらにらせん状に進化されていくのではないかと思ったりもします。

未来予測ですが、兼業農家も都市住民も専業農家もこれから半農半X化するのではないかと考えています。東北で出会った若い青年は3町という大きな面積でお米づくりをしながらNPO法人をつくっていました。これを専業農家と言えるかどうか。専業農家という言い方も兼業農家という言い方も戦後にお上がつくった言葉ではないかと言われる方もあるんですが、そのへんも調べていきたいと思っています。

拙書『半農半Xという生き方』という本を読まれてたくさんの方が綾部に来てくださるのですが、多くの方が「X」を探しておられます。大体は自分の向かうべきテーマ、ライフワークはわかるんだけど、それに飛び込むべきかどうか、いろんなことを考えていらっしゃるようですが、キーワードは自分が大好きなことを仕事にしていけ

ることではないか。僕も10年間、企業にいて、そこで身につけたこともたくさんあるんですが、早めにチャレンジしていただきたいなと思います。ここには若い世代の方がたくさんおられますが、定年後という30年後から頑張ろうという時には地球はどうなっているかわからない。東京は沖縄くらいの温度になっていたり、北海道が適温になると言われますが、できるだけ早いうちのアクション、具体的には5年以内のアクションがいいのではないかと僕は思っています。

これからの時代、二つのセンスが必要としたら1つが“Sense of Wonder”。もう1つは地域の問題を仕事にしていくセンスが問われてくるかなと思います。いまメッセージをあえてするとしたら「スモールアクションを積み重ねていきましょう」ということ。「情報発信」が大事です。皆はずでいろいろなことを学んでいるので、それを発してほしいなということです。以上が「半農半X」の説明でした。

「里山ねっと・あやべ」について

次は「里山ねっと・あやべ」の説明をしたいと思います。「里山ねっと・あやべ」というのは2000年が綾部市制施行50周年で、その時につくられたものです。この時に3つの組織が同時につくられました。「里山ねっと・あやべ」「ボランティア総合センター」「環境市民会議」の3つが綾部にできました。ハード事業からソフト事業への転換をメッセージにするということでもあったのですが、「里山ねっと・あやべ」はその年に発足しました。

私の母校である豊里西小学校が閉校した

のが1999年3月で、私は1999年1月に綾部に戻ってまいりました。この年を狙って帰ってきたのではなく偶然だったんですが、そこに丁度、跡地をどう活用するかという話が出ていました。それから綾部市においては東部地域にあやべ温泉ができたり、お金の投資が集中していて、それに対して市民から「西部への投資はどうするのか」ということを言われたことがあったのではないかと思います。それで「里山ねっと・あやべ」というソフト事業に対してお金が回ってくるようになりました。

「里山ねっと・あやべ」は公設民営ですが、市長の発案で発足、数年後に法人化したものです。補助金、事業の委託などで運営していますが、最近では綾部市役所の仕事をかなり奪っている傾向があるのではないかと思います。たとえば商工観光課にいろんなメディア、テレビ局から問い合わせがあったのですが、いまでは「里山ねっと・あやべ」に来るようになりました。それはインターネットで検索すると「里山ねっと・あやべ」の方がヒットしたり、発信しているイメージとか、いろんな人を紹介できるというネットワークが構築されてきたからではないかと思います。農林課にグリーンツーリズム、都市農村交流の仕事が来ますが、アイデアをなかなか出せる体質でもなかったのが、農林課の担うべき仕事で「里山ねっと・あやべ」の方に来ようになって、そういう意味では行政が本来の仕事のみをするように、行政のスリム化がなされていったのではないかと思います。

龍谷大学でも里山学が取り上げられていますが、里山ブームがありました。メディアに里山が登場するような時代でブームも定着していますが、その中期頃に「里山ね

っと・あやべ」ができたのではないかと思います。里山ブームの頃、綾部に残された資源、未活用なものとしての自然があった。グリーンツーリズムの時代、農村は農村だけではやっていけなくて、都市からの新しい風が生まれないといけない時代であった。そういうことが発足の背景ではないかと思います。

「里山ねっと」のコンセプト

「里山ねっと・あやべ」のコンセプトですが、「里山力」×「ソフト力」×「人財力」。これは私が勝手につくったものですが、この3つの力を生かして里山、農村部の魅力を市内外にPRする。都市交流や終の住処としての綾部定住化を促進し、21世紀の綾部の可能性を模索するために2000年7月発足しました。私は2000年発足当時からスタッフをさせてもらっていますが、2006年3月、NPO法人として認証されました。活動を通じて綾部ファンが一人でも増えて交流・定住化が促進されて、持続可能で競争力のあるオンリーワンのまちにすることをミッションとしています。理事長は京都大学の南山陽子先生で、副理事長は綾部出身でJR東日本で取締役をされた町井且昌さんが帰ってこられて引き受けていただいています。

「里山力」というのはいろんなことが言えると思いますが、風景や癒しの力です。「ソフト力」は多様な里山の伝統文化、アイデアなど。余談ですが、最近、「ソフトパワー」というコンセプトが言われます。「人財力」とは夢や思いや志、キャラクターなど。最後はやはり人ではないかと思います。

「里山ねっと・あやべ」の主な事業を紹介しますと、森林ボランティア、遊休地を利

用した米づくり塾、そばづくり塾、石窯をつくってパン焼き体験、田舎暮らし相談などです。農家民泊が大変流行っていて、そのプロデュースをしたり、情報発信にも力を入れています。空き家登録制度があって、綾部市の事業ですが、委託事業を行っています。綾部には現在900戸の空き家があります。それをただ眠らせておくだけではなく古民家を探されている都会の方がたくさんおられるので、それを紹介するような制度が綾部にあって、そういう意味では綾部は「開かれたまち」というイメージがあるのではないかと思います。でも空き家というのはすぐ売ってもらえるものではなく、貸してもらえないものではなく、家の中に入れば仏壇があったり、物が一杯あって、物置になっていることもあり、空き家のままではないんですが、綾部の人口を増やそうと思えば、空き家に誰か入ってもらおうか、団地に住んでもらおうか、「櫛^{クヌギ}の里」という農地つきの分譲地に家を建ててもらおうかしありません。市街化調整区域とか都市計画法とかあって、どの土地にも勝手に家を建てることはできません。綾部の人口は現在3万8,000人を切っていて人口を増やすことは、とても大変です。でも一人が加わることによって大きく変わることがある。北海道の富良野の例で言えば倉本聡さんという作家の方が入られたことによって大きく変わりました。

「里山ねっと・あやべ」は綾部市里山交流研修センター（旧豊里西小学校）を事務所として、その指定管理者となっています。設立から5年後に予算が下りて、工事を行い、宿泊可能となりました。そこで大人なら1泊3,000円（素泊）で泊まってもらって大学のゼミなどに使っていただいています。

今年から「綾部里山交流大学」を開校予定で、九州や東北にはグリーンツーリズム大学がありますが、この夏、綾部で行いたいと思っています。テーマは「交流が生み出す新しい価値（交流デザイン）」。

1万の物語

レジュメには特筆すべきことを書きました。この中から「里山ねっと・あやべ」らしさが表現できるのではないかと思います。一見何もなさそうな綾部市に視察が大変多いです。京都府美山町も視察が多いのですが、何もなさそうな綾部をなぜ視察されるか。わが町でもできそうというヒントがあるのではないかなと思います。徳島の上勝町の葉っぱビジネスはなかなかできそうにないですし、高知の馬路村の柚子を生かしたまち起こしもなかなかできそうにないかということで「普通性」があるのではないかと思います。

旧保健室を改装して「あやべ田舎暮らし情報センター」と名付けたんですが、NHKテレビで放映されて電話がジャンジャン鳴って大変なことがありました。ネーミングの大事さをそこで学びました。そこでは田舎暮らしに関する情報、本を揃えています。そういうことをパッケージにしまとめて発信していくことの大事さを学びました。

京都府の中でも中丹地域（福知山、舞鶴、綾部）というのは観光客が少ないゾーンらしいですが、観光客を今から300万人にするとか50万人にするとか、売上を300億円にするのは難しい。その中で苦肉の策で考えたのが、綾部で都市・農村交流によって生

まれる「物語数」で日本一、世界一になったらどうかという発想です。私はここで「1万の物語が生まれたら」と考えています。たとえば都会の方が農家民泊されて、主であるおばあちゃんのために名刺をつくってくれたということがありました。おばあちゃんは70歳で、人生初めて名刺を持ったと喜ばれた。都会の若い女性にとってはパソコンで名刺をつくるのは簡単で、それをプレゼントされたのです。そういうことが一つの物語としてカウントされていく。それは小さなことなんですが、積み重なっていくと大きな力になっていくのではないかと。新しい指標として指数として「物語」があるのではないかと世に提案していきたいと思っています。

旅人がエッセイを書いてくれるまち

あとは「旅人がエッセイを書いてくれるまち」というキャッチフレーズを考えてみました。綾部では農家民泊をやっていますが、泊まれた若い男性、女性が上手にエッセイを書いてくださいます。最近はメールでやりとりをしますので、その人が文が上手か、そうでないか、すぐわかるので、泊まれた後、「体験記エッセイを書いてください」と頼みますと、皆さん、ボランティアで手弁当で書いてくださいます。それをホームページで紹介しますと、読まれた方が「すごくよかったので泊まりたい」ということで、すごくいい循環になっている。「旅人がエッセイを書いてくれるまち」というのも売っていききたいのです。ある有名なまちは「ごみを旅人が残して困る」ということを言っていました。ごみを残されるだけのまちを超えて、ということもあるの

ではないかと思います。関東からわざわざ綾部に来てくださった方が言われ、ハッとしたことが「里山ねっと・あやべはアポイントメントがいらんじゃないか」という台詞でした。そこで思ったのは教授と面接する時も、就職活動して会社を訪れる時もいろいろなことにアポが必要な社会になっている。「アポのいらんまち」。それはどういうことだろう。「コモンズ空間」としての場所、開放的な場所、閉ざされていないということではないかと思います。これがとても重要な意味を持っているのではないかと思うのです。

人生探求都市

私は綾部というまちは「平和都市」×「里山」×「自己探求」というキーワードの掛け算でどうかと思っています。キャッチフレーズを挙げるとしたら「人生探求都市」はどうかということを経部市長に提案しています。この間、鳥取の境港に行ってきました。「ゲゲゲの鬼太郎のまち」、「魚と鬼太郎のまち」というキャッチフレーズがついています。どんなキャッチフレーズでもいいんですが、キャッチフレーズはとても大事です。今、つけてはいけないのは「自然がいっぱいのまち」です。日本中、自然がいっぱいなので、それでは伝わらない。そんな中で綾部らしさを表現するものとして、「人生探求都市」はどうかと思うのです。心の時代にますますなっていくのはわかっていることなので、それを先取りするという戦略でもあります。

里山ねっとでは、ホームページで発信を2001年から始めました。都会の方が見てくださって言われるのは「田舎にしては、い

いホームページですね」。発信も頑張っています。発信を始めてわかったのは書き手と写真の撮り手が大事だということでありました。「地元学」にも通じるのですが、現代的な感性で現代的な写真を撮る。寺社仏閣を撮ってきたような古い観光の時代とは違って、人間のスナップとか、身近な暮らし、小さな暮らしの美しさとかそれを表現することが大事です。それをどんな村でもどんな中山間地であっても全国発信可能ということがわかりました。キーワードは「感性」。「感受性」、「Sense of Wonder」ということではないかと思っています。

近くに定年退職された方でビデオおじさんという方がおられて趣味のビデオを生かして「里山ねっと・あやべ」の活動をとってくださいます。パン焼きとか森林ボランティアとか。その方がNHKの視聴者投稿コーナーに投稿されると関西一円で放映され、それを見られた方が綾部にやってきてくださる。ビデオおじさんのXを活用するので。農家民泊のおばあちゃんの名刺をつくった方がプレゼントしてくださる。都会でデザイン会社を経営している方が村のためにポスターをつくって手弁当でプレゼントして下さるとか。そういう物語、ネタががいっぱいある。それをホームページで紹介することによってまた広がっていくということがあります。

「里山ねっと・あやべ」がずっと続けてきたこととして地元通信を配布してきました。小学校区内にスタッフが全戸配布しますが、自治会の回覧板を使うと見てもらえないことが多くて、一軒、一軒回ることによって、おじいちゃん、おばあちゃんまで見られるようにしました。地元を歩くことが大事だったのではないかと思います。

あるもの探し

「里山ねっと・あやべ」は地元学を学んできたのですが、「ないものねだり」から「あるもの探し」へということ意識してきました。今までは、ないものねだりをしてきた時代だったと思いますが、私たちの足元にはいっぱい宝物があるんじゃないかということではないかと思っています。2000年の「里山ねっと・あやべ」の発足の時、基調講演してくださった浜野安宏さんが「工場誘致の時代から天才誘致の時代へ」ということを言われました。今、どういう時代が始まっているかということ、「田舎が人を選ぶ時代」です。一見、都会の人が田舎を選んでいるような気がするかもしれませんが、進んだまち（村）では、村にいない人材をリストアップして、その人材を空き家を用意して来てもらうことをされています。そういう時代がもう来ていると私は思っています。

テレビ東京が「10万円で暮らせるまち」「農家民泊」とかの番組を首都圏で放映されます。それに綾部が紹介されると、電話がジャンジャン鳴るのですが、かかってきた電話の大半は「安いから行きたい」とか「定年退職で暇だからテレビを見ていたから」とかです。今、テレビを見ている人たちの中に私たちのターゲットは少ないということがわかりました。このことを他の村、グリーンツーリズムで有名なところの方と話をしてみますと、やっぱり同じで「テレビを見て来る人は今、ターゲットじゃないな」と言われています。もうすでに意識の高い人はテレビを見ていないのではないかとと言われることがあります。テレビというのが一つの時代を終えたようです。また

新しいテレビの時代が来るかもしれませんが、テレビが持っていた影響力が大分変わってきたかなと思います。そういう意味で「田舎が人を選ぶ時代」において何をしなければいけないかと言うと、ターゲットを定め、その方に届く的確なメッセージの発信ではないかと思います。

「里山ねっと・あやべ」のホームページを今日、帰って見ていただきたいのですが、何気ないようですが、コンセプト、設計の哲学があります。「デザイン」×「イラスト」×「メッセージ」×「哲学」という計算式です。綾部出身で全国的な活動をされている方がデザインを担当、イラストレーターの方もそうです。メッセージは私が書いています。哲学というものがとても大事なかなと思っています。ホームページにもコンセプト、哲学がいます。「田舎にしては」という表現で褒めていただくことができますが、見えるものではないですがこうした公式があって表現をしています。「つばさがはえる地図」という、旧豊里西小学校の区内には地域マップがあります。小さな村のマップなのですが、綾部市内においてはどんな村にも地域マップがあるようなデザイン戦略が描けないかなと思っています。どの村にも多様性があって、魅力があって、それを表現すれば、旅人がそこにやってきて満足してくれることも可能ではないかと思うのです。そのことを「つばさがはえる地図」が証明してくれました。これも「里山ねっと・あやべ」のホームページで公開しています。

都市・農村交流は結局は「情報交流」でもあります。発信力の差が明暗を分ける時代であると思います。発信力のためには発信の量も大事で、むやみやたらに量がある

というよりも発信を重ねていくこと、積み重ねていくことが大事だと思います。2001年からホームページを始めたのですが、更新を続けていくことは大変でした。重ねていくことは大変だったのですが、重ねていくことでわかってきたのは「メッセージすることの大事さ」ということです。

この後は質問を受けたいと思います。

（質疑応答）

司会 「X」という文字の中にいろんな意味が込められていることがよくわかりました。それから塩見さん自身の中で自分の生き方と「里山ねっと・あやべ」という団体の間にはまたXの交差があることがよくわかったと思います。今、いろんなテーマがいっぱい入っていますので、少し皆さんからこのへんはどうなんだということを質問をしていただきながら塩見さんから答えさせていただくことにします。

村の即戦力

質問 私もテレビを見るのですが、テレビを見て来た人というのはどんな感じでしょうか。冷やかしみたいな感じとか。

塩見 それはありますね、1回限りという方とか。リピーターにさせない僕らが悪いのかもしれませんが、ただ安いからとか、退屈だから来たとかありますね。電話がジャンジャンかかってきても、本当に来てほしい方というのがあります。求めるターゲットというのが、それぞれ団体にはあるのではないかなということです。団塊の世代を狙う施策、各都道府県が定年退職される層を狙っていますが、本当に農村がほしいのは子連れの家族だったり、若い世代がほ

しいということと言われるところが意外と多い。しかしなぜ団塊の世代なのか。各団体においてターゲット、来てほしい人があるんじゃないかと思います。僕の意見と綾部市の意見は違うかもしれませんが個人的な意見ですが、私は若い世代を優先すべきだと思っています。たとえば京都の美山町は「50歳までの人に来てほしい」と年齢制限されたことがあったんです。たとえば60歳でこられても田舎に慣れるには10年かかる。70歳になる。だからできるだけ早めに来てほしい。僕らも「田舎に来られるならできるだけ早めの方がいい」と言うんです。もちろん都会で培われたキャリアがある。即戦力もあるので、結局はその人物次第なんです。

今、テレビで発信したとしても茶の間においてほしい若い人たちがいないとか、大分違って来たかなと思います。テレビ業界はそれで危機感を持っていると思いますが、テレビの取材を受けると、昔の名残でうれしかったりするんですが、徒労に終わることが多かったです。僕らだけかなと思うと他の市町村も同じことを言われて。

東北で聞いて象徴的だったのは、今、来てほしい人は「言葉のいらない旅人が理想の旅人だ」とおっしゃったことです。農作業していたら「一緒に手伝っていいですか？」と聞くのではなく、自然に手伝う人。あるおばあさんが言われたことらしいですけど「言葉がいらない旅人」、会った瞬間から意気投合して言葉も不要で10年来の友だちの関係があつという間にできちゃうようなことです。今、そういう意味では受け身型の方が多いのかなと思います。そういう意味ではインターネットは自分で能動的に検索して探していくスタイルだと思っています。

ます。

今、綾部に来てほしい人は、老後の隠居先として来てもらうのではなく、村の中でのんびり暮らしてもらうより、村の即戦力として来てほしいのです。それだけ農地も荒れています。限界集落と言われるところも綾部にはたくさんあって、入ったらいきなり自治会長をやれとか言われる時代です。積極的な人がほしいのです。旅も物見遊山的な観光からアクション型、体験型に変わってきているように、求める人材においても変化してきています。綾部などはなまやさしい方で、もっとしたたかな戦略を持ってやっている地域はありますね。

「田舎暮らしの相談会」をしても、まだまだ冷やかしが多かったりします。本気の人をいかに掴むか。市町村が大合併して自治体が人材の取りあいをしているような状況です。京都府は田舎暮らしの人気では8番目くらいしくて、北海道と沖縄と長野がベスト3です。「京の田舎暮らし」を打ち出していこうという委員会をつくって、僕も委員に入っています。いかにいい人を京都に、ということで検討をおこなっています。京都府の山田知事の方針は団塊の世代に来てほしいのかもしれませんが。しかし村の現場の人は若い人に来てほしいということらしいのです。

質問 農村のこれからの生き残りに交流が必要だと。綾部市は京都市と近いところにあるというメリットは？

地理的メリットを活かす

塩見 キャンプで高知県の四万十川とかに行くんですが、何度も行きたいけれど遠いですよね。綾部というのは京阪神から1

時間から2時間くらいで、そのメリットをもっと生かすべきです。首都圏から綾部に持ってくるのは大変ですが、京阪神の特に大阪だったら北摂、豊中、茨木とかがポイントです。綾部というのは丹後半島より有利だと思います。遠いところでも逆手にとって一泊必ずさせてしまうとか、それぞれの作戦があるとは思いますが。綾部に移住されたアーティストの方は1時間くらいのドライブで都会から田舎に帰ろうとした時ではまだ頭がヒートアップしている。3、4時間になるとしんどい。そういう意味では綾部はちょうどいいそうです。あとJRとか高速道路があるというメリットを生かさないといけないけど、生かしきれていない。ようやくこれから戦略が立てられているのではないかと思います。

質問 滋賀県の甲賀市の合併自治体の職員をしています。移住されるのはどこの県が多いとおっしゃいましたか？

塩見 北海道と沖縄と長野県です。沖縄が年間2万5,000人来ると言われています。仕事がない沖縄に行かれるのは経済合理性がないと言われるますが、何とか食べていけると言われています。

質問 塩見さんが会社を15年おられて戻られる時に乗り越えられた環境は何だったのでしょうか。

塩見 私は28歳の時、内村鑑三さんの『後世の最大遺物』という岩波文庫を読みまして、そこに書いてあったのは後世に何を残して死んでいこうか。お金か思想か事業かということでした。内村鑑三さんが33歳の時、その講演をされていました。講演の年代は1894年ですから110年前のことです。110年前に33歳の内村鑑三さんが講演されて大変感動して、僕も33歳で人生をリセット

しようと思ったのが28歳で、33歳10カ月で綾部に帰ってきました。頭の中では「半農半X」の方向でいいということはわかっていたんですが、Xで食べていけるかということが自分の中にあったし、妻も感じていました。僕の父は公務員で妻の実家は自営業でしたが、自営業の大変さを知っていたからだと思います。僕は辞表を出してから妻に伝えたので無事に帰れたということです。それを出していなかったら、ずるずる会社にいたのかもしれませんが。帰るとそこに閉校された学校が用意されていて「里山ねっと・あやべの事務局をやらないか」という話も入ってきました。加藤登紀子さんの夫の故藤本敏夫さんが「ポジションが見つかればミッションが見つかる」ということを言われていますが、活動の舞台、フィールドがわかるとミッションが見えてくるということだったのかなと思います。僕にとっては33歳というのは大事な原点で、未だに走っている車のナンバーで33番を見つけるとあの頃を思い出します。33歳前後で悩んでいる若い人が大変多いというのが印象です。あなたのお歳は？

質問 今年33歳ですけども（笑）。戻られるまでに半農半Xの考え方には至っておられた。それは都会で暮らされる中で、会社の同僚からの影響とかで生まれてきたものですね。

塩見 そうですね。企業の中での自分の居場所とか、自分の役割、個性とか考えました。皆、個性的なんですね。僕だけ個性がないなど。環境問題と生き方の問題と、その二つがあったからこそ「半農半X」というコンセプトは生まれてきた。その二つを感じなかったら「半農半X」というコンセプトは生まれてなかったなと思いますね。

そういう意味では同期の皆に感謝です。先輩も皆個性的でした。会長、社長、経営者も皆、個性的。皆から見ると僕は逆に個性的だった面もあるかもしれません。文学部で歴史をやって奈良・平安時代をやっていて個性的だと。

「半農半X」のひろがり

質問 団塊の世代の方が地元からそんなに求められていないのに、世間では団塊の世代に対して「田舎に行こう」という流れがあると。実際のところは新鮮というか、そうだろうなと思って聞かせていただきました。塩見さんがメッセージを発信をされてから、綾部に実際に来られた方の人数が増えてきたという実感は数値的にも現れている感じですか？

塩見 移住をたくさんしてもらうにはなかなか限界があるので、すぐに数値が上がるということはないのですが、話していたら「半農半Xを知って綾部を知った」という方がたくさんおられます。メールも毎週のようにたくさんもらいます。我が家と「里山ねっと・あやべ」はすぐ近くなので、来訪者が、旅人がよく来られるのですが、その数は大変多くて驚きます。最近、台湾でも中国語版『半農半X』を出版させていただきましたが、台湾から旅人がやってきています。やっぱりそれはすごいことだなと思うのです。綾部市民もそれを感じてくれていると思います。メールの数や手紙の数は本当に多いです。我が家のポストに置き手紙があって「訪ねてきました」とかもあります。

質問 そうというのは行政的には数字にされたりとかという動きは特に？

塩見 それはこれからです。綾部市長は「半農半X」のことをあちこちの講演で話して下さったりしています。いまの農水省の方向としては集約農業で大きな農業、大規模農業を地域で営農する考え方になっていますが、その発想だと面積が一定以上必要です。しかしそれだけではいけないので小さな農業をしていく、やりにくい土地もあるので、小さな農業をできるように市ではいろいろ模索を始めています。綾部には「あやべ市民新聞」があって月水金で配られているのですが、市民に広く情報を伝えるのに大事な役目をしています。

質問 それは無料型の新聞ですか？

塩見 有料です。綾部市民新聞社という会社があるのです。綾部市民の大半はそれを読んでいるのですが、そこに情報を載せてくださっています。半農半Xの本を読んだ人で「里山ねっと・あやべ」にやってきて米づくり塾に参加したと書いてくださったり、市民に情報がうまく伝わるのです。

質問 僕も実家が滋賀県の豊郷です。実家に帰る予定であって小学校を覗く取材があったのですが、今、ブラジルとか海外から来たお子さんが普通に教室にいて、大変だろうけど、漠然といいなと思ったのです。台湾から観光客が来ているという。日本だと団塊の世代に来てくださいというやり方はわかるのですが、子どももこれから少なくなってくると思うし、海外に対してメッセージを発信して移り住むことが起こったらどういうふう考えられるか。そういうのは大歓迎なのでしょうか。

塩見 田舎暮らしを受け入れる時も同じだと思いますが、どんな人に田舎暮らしをしてほしいのか、移住してもらおうかと考えていくと、「手に職のある人」なのかなと自

分は思っています。田舎には仕事がないといわれるので、手に仕事のある人なら自営できたりという可能性もあります。そういう人の方が困らないし、困らせない。「来てください」と言いながら「仕事がないので」と帰ってしまわれることも全国的にあると思います。そんな中で田舎でも高齢者の施設がたくさんあるし、ヘルパーの仕事、福祉の資格を持っているとか看護師、パソコンができるとかあるならいいと思います。漠然と移住というよりも手に職を持った人が綾部に集まれと個人的には考えています。綾部の特質として、ものづくりの文化があったらいいのです。綾部というのは綾織物、渡来系の文化があったのです。そのような中でもものづくりに対して熱意があるので、半分農業、半分ものづくりができる人が来られたら面白いのではないかと考えています。そういう意味でも排他的でないフィルターがあればと思います。

好きなところ3つ掛け算=オリジナリティ

塩見 この指止まれとしたら手に職があった方が後々みんな幸せかと思うのです。そういう私は手に職は何もないのですが（笑）。皆さんに言うのは「3つの大好きなことの掛け算で勝負したらどうか」ということです。一個では勝てない。柔道で言うと受け身があって、投げられて、寝技がかけられる。好きなことを3つ掛け算するとオリジナリティが生まれると思うのです。最近、京都市内の看護師さんが綾部に移り住みたいと言ってくれています。その方は旅も好きだし、お年寄りも好きだし、料理にも関心がある。看護師の仕事もできる。それらを組み合わせた新しい仕事をつくっ

たらどうか。「型をつくれ」と言っています。一つの仕事では頑張れないかもしれないけれど3つの掛け算で何とか食べていけるような道をつくったらどうかと言っています。キーワードは「大好きなことを持っているか、持っていないか」ということだと思います。

質問 人類学を講義しています。南の城陽市の田舎、山城青崎に住んでいます。そこでまちおこしを考えているのですが、今日の話は非常に参考になりました。ありがとうございました。ホームページのコンセプトで、メッセージ、哲学が重要だと。そういうものをどういう時に考えられるのか。発想されるのか。どうやって洗練されていくのかということをお聞きしたいと思います。

塩見 これは新しい形じゃないかなというものは敏感に周囲から入ってきます。朝の3時から6時というのは子どもにも妻にも邪魔されない時間なので、思索をしたりしています。田んぼでの時間、そういう時間で結構、研ぎ澄まされるというか、純粋な気持ちでいられます。社会がオープンで、シェアマインドを持ち、分かち合う社会で、独占でなく私物化されない方向は今後絶対だろうと思います。平和を求めているのは絶対だろうと思うのですが、そんな中でいるんなものに取り組みながら、田んぼで練って、家に持ち帰って、できれば言葉化、言語化をするように心がけています。漠然と1,000字で説明しても伝わらないので、一語とか、短い言葉で表現することを心掛けています。基本的なスタイルは、いいキーワードが見つかったら、必ずそれをメディアで、ブログとかホームページで公開することを心がけています。携帯電話は好きで

はないですが、持たないといけないので、気づいたキーワードは入力したりということもコツコツしています。言葉への感受性を持つことです。今（6月）は夜明けが4時半くらいになってきて、ツバメが早く啼いて、ホタルがそろそろ光り出したなという世界なのですが、いろんなことからメッセージを受けとります。僕は宗教も政治も関心はないのですが、いろいろな出会いと

か本とか田んぼの経験とかから見えてきたものがあります。

司会 一応、ここで講演会は終わりたいと思います。院生の皆さんと今の質問も加えて、場所を変えて、もう少し塩見さんを囲んで議論していきたいと思います。とりあえずこれで講演会は終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

[2007年6月2日講演]